

／ 発見！ ／

おごおり遺産

No.40

下町区 しめ縄づくり

正月飾りにも用いられる「しめ縄」。今回は、下町区で行われるしめ縄づくりをご紹介します。



右縷い(右撚り)



左縷い(左撚り)

しめ縄とは、藁や麻、茅などを縷い、縄としたものです。日常で用いられる縄が右縷い(右撚り)なのに対し、しめ縄は神聖なものとして区別するため、左縷い(左撚り)でつくられます。しめ縄の歴史は古く、「古事記」や「日本書紀」に『シリクメナワ』として登場しており、古来、しめ縄を張ることで神が占有する場所を示していました。平安時代には、正月に年神(新しい年



藁を束ねて乾かす



木槌で藁を打つ

の福を授ける神)を迎える準備としても飾り付けられていたことが「土佐日記(紀貫之著)から読み取れます。江戸時代になるとその風習は庶民にも広がり、地域や家庭によって独自の形に変化し、受け継がれていくことになりました。下町区では、毎年12月第1日曜日に「日吉神社しめ縄奉納(しめ縄づくり)」が行われます。これは昭和50年代初期に行われていたものを、昭和60年から自治公民館活動としてスポーツ振興委員会を中心に、区役員、小学生児童、PTAによって行われるようになった行事です。しめ縄づくりは10月中旬から始まります。地元農家の田んぼで稲刈りを行い、刈り取った藁を日吉神社の境内で干して乾かします。当日の境内には、昔から住んでいる人・新しく住み始めた人に関わらず、老若男女多くの人が集まります。挨拶の後、無事に作業が行えるようお神酒をいただき、その後、藁の袴(葉の部分)を竹ぼうきで取り除きます(藁すぐり)。そして、その藁を木槌などで叩いて、繊維を柔らかくします(藁打ち)。



完成したしめ縄

境内西側では、高い木に鉄パイプを渡し、柔らかくした藁を吊下げながら、太く長い縄をつくっていきます。藁束を強く握りながら、緩まないよう力を込め、ねじり上げる力が偏らないよう息を合わせなければなりません。それを神殿用・神木用など計5本つくった後、縄から飛び出たヒゲを剪定し、「ぼんぼり」と呼ばれるサゲと紙垂を付けたら完成です。下町区だけでなく、市内の多くの地域で、それぞれ受け継がれてきた独自のしめ縄があります。つくり方が本に載っているわけでもないしめ縄を、体に染みつけた技や記憶をもとに、次の世代へ伝えながらつくり上げていきます。



全身で縄を纏う

神様に感謝をささげ、恩恵を授けてくれるよう、また見守ってくれるようにと、毎年つくられるしめ縄。神社を訪れた際は、思いが込められた手作りのしめ縄に、ぜひ注目してみてください。

☎ 75・7555
問 文化財課文化財係